

## 本 部 企 画

### 〈シンポジウム〉

### 「生」に寄り添う社会福祉：実践からの学びとこれからの展望

社会福祉法人 佛子園 理事長 雄 谷 良 成  
厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部 障害福祉課 障害児・発達障害者支援室 移行支援専門官 岡 崎 俊 彦  
社会福祉法人 ナザレ園 副理事長 菊 池 譲  
社会福祉法人 芳香会 地域生活定着支援センター センター長 酒 寄 学  
株式会社アニスピホールディングス 取締役 最高福祉責任者(CWO) / 福祉コンサルティング(ビーサイドユー株式会社 顧問) 櫻 井 大 悟  
ビーサイドユー株式会社 代表取締役 藤 野 将 睦

賛川 それでは、これからシンポジウム『「生」に寄り添う社会福祉：実践からの学びとこれからの展望』について始めていきたいと思います。本シンポジウムは、座長を本学学部准教授の菱沼先生にお願いしております。それでは早速、菱沼先生から、よろしくお願いいたします。

菱沼 皆さん、こんにちは。このシンポジウムの座長を務めさせていただきます社会福祉学部准教授の菱沼です。どうぞよろしくお願いいたします。

午前中は雄谷理事長さんから、とても素晴らしいご報告をいただきました。恐らく聞いてくださっていた皆さんがた、いろんな感想を抱いていらっしゃるかと思います。このシンポジウムにおいても、雄谷さんに引き続きご参加いただきましてお話しいただく予定になっておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

このシンポジウムにつきましては、各種の実践者の方々にご報告をいただきまして、今回のテーマであります『「生」に寄り添う社会福祉：実践からの学びとこれからの展望』ということで、このテーマを深めていきたくております。テーマを深めるに当たりまして、コメンテーターとして、今回、厚生労働省社会・援護局障害保健

福祉部障害福祉課障害児・発達障害者支援室移行支援専門官の岡崎さんにお越しいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。岡崎さんからは、それぞれの方々からご報告いただいた後にコメントいただくことになっておりますので、よろしくお願いいたします。

続きまして、シンポジストの方々をご紹介したいと思います。まず最初に、社会福祉法人ナザレ園副理事長の菊池さんです。本学の卒業生でもありますので、どうぞよろしくお願いいたします。続きまして、社会福祉法人芳香会の地域生活定着支援センターセンター長の酒寄さんです。酒寄さんも本学のほうを卒業されてから現場でご活動いただいているところです。

お二人については、社会福祉法人としての取り組みについてお話しいただきますけれども、もう少し広い観点から、このテーマを深めたいということで、株式会社のところからご報告をいただきたいということで、まずお一人が株式会社アニスピホールディングス取締役最高福祉責任者の櫻井さんです。どうぞよろしくお願いいたします。それから、ビーサイドユー株式会社代表取締役の藤野さんです。藤野さんも本学の卒業生で、清瀬を中心に実践活動をしてくださっているところで

す。うちの学生たちもいろいろアルバイトなどでもお世話になっているところですが、ぜひ学生の皆さんがたも現場のリアルなところのお話から多くのことを学んでいただきたいなと思っております。

そうしましたら早速、まずはシンポジストの4名の方々に、お一つずつご報告をいただきたいと思います。では菊池さんから、よろしくお願いします。

**菊池** 社会福祉法人ナザレ園の菊池譲と申します。下の名前は譲なので、ジョーさんと呼んでもらっています。よろしくお願いします。

先ほどの基調講演の雄谷さんのお話を聞かせていただいて、本当にあの仕組みをつくっていくのは相当のエネルギーが要っただろうなと思ったのと、あと福祉であれだけ建物やいろんな仕掛けをおしゃれに見せられる力というものすごいなと思って、真似したいですけど、なかなかできないんですけど。今日は、なぜ私が呼ばれたのかちょっと分からないですけども、われわれの法人で取り組んでいる事業がどんな感じかざっとご覧いただいて、その中から幾つかのことをご紹介させていただきたいと思います。

基本理念が、まず第1行目がキリスト教精神に基づく『愛』を実践していきますということで、キリスト教主義でやらせていただいています。『愛』を実践していきますというキーワードが後で、他のところで出てきますけれども、これが一番最初の1949年の開設当時、まだ制度ができる前の時代の建物ですね。何もない畑の所に創立者がちっちゃなおうちを建てて、身寄りのない高齢の女性の方々を住ませたということで、その後、制度に乗って養護老人ホームになっていきます。だんだん発展していくわけですが、十字架が付いたチャペルがあったり。これは、当時、婦人会の方々が慰問に来ていただいたときの写真ですね。当時は慰問品って食べ物とか医療品とかを

持ってきてくれた、今でいうボランティアです。これが昔、チャペルでお祈りをしていた風景なのですが、ヘアスタイルとかを見ると、この方々の親は明治じゃなくて江戸時代生まれなのだろうなというような、皆さん静かに祈りしておりますが。

ナザレ園と聞くと、慶州ナザレ園って韓国のナザレ園の名前を聞いたことがある方もいると思うのですが、よく私が聞かれるのは、韓国のナザレ園が日本のナザレ園をつくったのですかって。その逆なんですね。初代の創立者が韓国に視察に行って、日本人が刑務所に入っているということから、沢山そういった方々を何とか支援したいということで始まったのが慶州ナザレ園でして、写真、ちょっと小さくて見えづらいかもしれないですけど、日本から送った物資の段ボール箱にトップとか書いてあったりしています。当時、孤児と言われる方々や現地の高齢者の方々の福祉も交えて。あと、日本に200名程度、帰国を支援したけれども、帰れなかった、あるいは帰る先がないとか、帰りたくないという方々のための日本人向けの老人ホームが慶州に残っているという状態で、今はこういった立派な建物が韓国にあるのだけれど、ここのホームページを見たら『愛』という言葉が載っていたので、創立者の理念、思いは、ここでもちゃんと残っているんだなということです。

現在の茨城県那珂市に本部があるのですが、ナザレ園のメインの敷地の上空写真、こんな感じになっていまして、養護老人ホームから始まったので、ピンクで表している養護老人ホーム、盲養護老人ホーム、救護施設という措置施設が三つありまして、ナザレ園の一番ずっと通奏低音のように大切にしているところはセーフティーネット機能かなと思います。黄色の部分が、今日お話でちょっと強調させていただきたい部分なのですが、住まいとか通所とか、このようなサービスをやらせていただいております。文字の大きさ

がちちょっと見えるかどうか分からないですけども、共生型デイサービスとか共生型特別養護老人ホーム、障害者の方も介護保険の事業所で過ごせるように今はなっております。

訪問事業では、定期巡回随時対応型訪問介護看護という24時間の介護保険の訪問サービスですとか、あとは訪問看護ステーションですとかいろいろやらせていただいておりますが、自主事業として生活サポート事業。これは職員で、社会福祉士とか精神保健福祉士を持っている職員は兼務でCSW、コミュニティソーシャルワーカーしてもらっていることになっていて、地域のいろんなワンストップの相談だとか、あるいは現地に行っているいろいろ何だかんだおせっかいを焼いたりとかいうこともやらせていただいています。雄谷さんの所に毎日、ごちゃまぜではないんですが、時々、企画として、今、コロナでちょっと休んでいますけれども、地域の小学校との合同運動会、ここで高齢者、障害者、保育園児と小学生たちが一緒に運動会をやっているというのもごちゃまぜ感があって、すごくすてきな瞬間です。その他にいろんな研修事業などもやっております。

**菊池** ありがとうございます。私、専門職大学院で勉強をして、その後、13年前にナザレ園に就職したのですが、救護施設という所に最初、配属されまして、一回そこに入ったらば高齢者になるまで、あるいは死ぬまでずっとそこで生活を続けるという方々がほとんどだったですね。居宅生活訓練事業というアパートで1人暮らしの練習をして、その後、外に、社会に、地域に出ていけるといいよねという制度があるのを知って、その事業を立ち上げました。立ち上げるに当たって、利用者さん全員、90名ぐらいいたのですけれども、ホールに集まってもらって、こういう事業をやりますが、1人暮らしの練習をして外に出たい方って言ったらば、半分ぐらいの方がざっと手を挙げました。だから、入所している方で、自分で

望んで入ってきている人はいないだろうなと、ここで施設でずっと暮らしていくのは、本音は嫌なのだろうなと思って、こういった取り組みができているのはいいなと思います。

一般のアパートに移行する方もいらっしゃるし、あとは障害者グループホームに行く方もいらっしゃる。あとは、いったん出て、また戻ってくる方とか、いったん出て、しばらくたって要介護になって老人ホームに行く方とか、いろんな方がいらっしゃいますが、一瞬だけでも外で生活できるというのは、本当に夢がかなってうれしがってくれますね。こういった支援ができるのが面白くて、よいなと思います。

この図をご覧くださいなのですが、これは我々がユニバーサル就労支援事業所と呼んでいるゆで卵の図というか写真で説明をさせていただきます。ユニバーサル就労という言葉は、千葉県にあるNPO法人が商標登録しているそうなので勝手に使っちゃいけないそうなのですが、その方とお会いして、ナザレ園さんの活動だったらユニバーサル使っていいですという許可をもらっていますので、ユニバーサル就労支援事業所です。

この黄身の部分が、生活困窮者自立支援法の認定就労訓練事業という部分です。これで一応、制度でしっかりと、ちゃんと茨城県に認定を受けて、要は奴隷労働みたいなことはやらないよねというのを、ちゃんと計画を立ててきちっとやるよねというのを認めてもらった上で事業所を立ち上げ、この白身の部分、ここは自主事業です。制度外、あるいは地域における公益的取り組みにもなると思うのですが、赤い矢印が入り口ですね。自立相談支援事業というのが各自治体にある相談窓口ですね、生活困窮者自立支援法の。そこから黄身の部分に来る方もいらっしゃいますが、あと保健福祉センター、これは市の運営しているワンストップの相談窓口ですが、そことか、あと最近、半分ぐらいはハローワークから来ますね。

あと、ご家族からも来ますけれども、いわゆる

このユニバーサルというのは中間的就労、なかなかすぐには一般就労、難しいよねということで、引きこもりがちの方が多いです。家族から何とかしろということで無理やり押し出されてくる人もいますけれども、ハローワークからいろんな所、ここへ面接に行ったらどうですかというので、いろんな所を受けたけれども、全部、落ちちゃったという方だとか、あるいは障害を持っていないんだけどという方とか、いろんな方がいらっしゃいます。ここで施設の仕事を細かく分配して、小さなパーツだけでも、週に2時間、3回だけまず来てみましょうかと、まず居場所として、通う場所として。人とのコミュニケーションを練習するだとかというのからだんだん複雑に、あるいは長時間になっていって、中にはナザレ園の職員に雇用される方もいます。その他に、もちろん一般就労に結び付く方だとか、あるいは手帳を持ってないで来る方がほとんどです。障害者手帳取得の支援もさせていただいて、その後、障害者就労支援事業所に移行する方もいらっしゃいますが、ナザレ園の職員になる人もいます。

例えばですけれども、救護施設のランドリー、お洗濯のお手伝いを作業でやってもらっていて、しっかりやる方なので、週3回、2時間だけ職員として契約して働いてみましょうということで契約をしました。一般就労していたことがあるけれども、人とのコミュニケーションにつまずいて大変な思いをして辞めてしまって、引きこもってしまったと。でも履歴書を見たら、TOEICが九百八十何点とかで、ほぼ満点なんですね。どうやってこの勉強したのですかと聞いたら、ずっと家でアメリカの映画とかドラマを見続けていましたと。英語の字幕を付けてずっと見続けて、特別に文法とか勉強してないけど、こんな点数が取れちゃいましたということで。だから、すごい英語がそんなでできる方が洗濯をやってくれています。すごく真面目に、洗濯畳みは利用者さんと一緒にやったりしているのですが、あんまり長い時

間になると疲れてしまうのでということで、そのぐらいの短い時間でやっております。

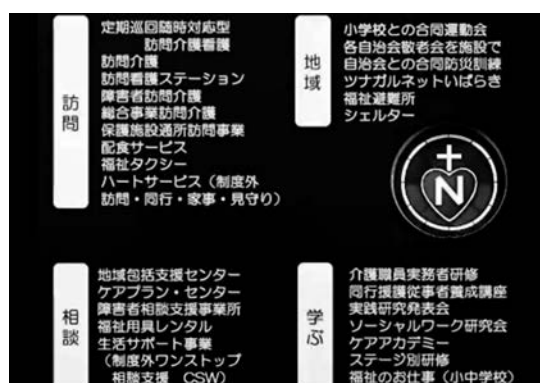
この図で下のほうに JOB、JOB、JOB、求職者、他の一般の求職者と、あとお金の絵があるんですけども、われわれのジレンマとしては、ナザレ園の職員の中に、手帳を持ってないけれども就職してくる方、生きづらさとか、やりづらさを抱えている方が入ってきますね。外部の方から見ると、職員というのは利用者に対して、この利用者というのは、特養だとか、デイサービスだとか、いろんな仕事がありますけれども、利用者に対してちゃんとケアができるんですよね、支援ができるんですよねと、対人援助の基本は分かっているんですよね、もちろん虐待なんかしないですよねという外側から見た一職員ですね。でも、いろんなコミュニケーションの課題を抱えている方、職員は、職員間でのケアがすごく必要になってきます。そのこの見守りだとか、合理的配慮だとか、その辺りもかなり他の職員の負担になってきて、そのこのジレンマはすごくありますね。障害者の方の採用も進めているけれども、手帳がないけれども、色々と課題を持っている、生きづらさを持っている方をどんどん職員として入れていくと、他の職員が負担に感じる。利用者への支援は、外から見ると、ちゃんとできるんだよねと思われてしまう。

下のほうに、たくさん求人、求職者がいるのですが、われわれがやんなきゃいけないことは、とにかくいいサービスをやって雄谷さんの所みたいにならしたいことをやっていますと言うと、全国からぜひここで働いてみたいという人が集まるのかもしれないですけども、そういう素敵な取り組みをやって、人がもっと来てくれるとか。あと、制度のビジネスだけでなく、制度外でもお金が、ちゃんと収入が得られる仕組みをどんどん考えていって、福祉業界で働いていても給料低いよね。じゃなく、ちゃんといろんな職員さんを採用できると。そういった職員で合理的配慮をしながら利用者へのサービスが提供し続けられるという

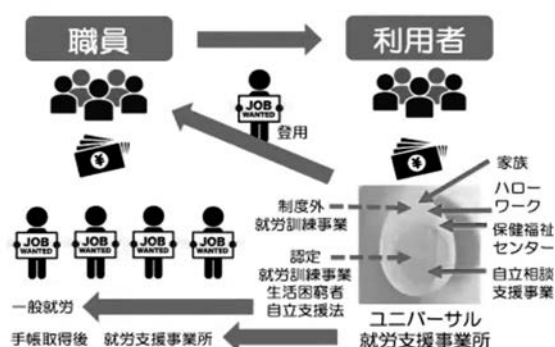
ことを目指しているのですが、それが結構、ジレンマとして感じております。

という辺りを報告させていただいて、あと最後の1枚だけ、ごめんなさい。引きこもりがちが、その年齢が10代後半から65歳までの合計だと100万人を超えたそうなんです。その中には障害者手帳なしの方で中間的就労、先ほどのような、まずは最低賃金を割ってでも行く場所があって、何らかの訓練が受けられるという場所が必要なのだけれども、そこに対する人件費とか事業費を出す制度は今のところないのです。生活困窮者自立支援法の先ほどの事業も、お金は全く出ないので、法人や会社からの持ち出しになります。

こういった引きこもりがちの方はSOSを発信しないので、いろんな相談窓口で座って待っていても来ないということで、どうやってこういう方々、ブルーの棒の所を私は何となくボーダーラインで、ここから端っこのほうにずれる方はなかなか仕事が難しい。ボーダーラインの方々は、いろいろやりづらさを持っているけれども、仕事に就けるかもとか、仕事をしたいと思っている人も、この中にいるだろうけれども、支援が必要という方をどうやって探し出すかというので、最近はやりのEBPMですか。データを分析すると、日本にはさまざまなデータが、ここにあるような、住民票だとか、年金だとか、税だとか、手帳だとか、そういったデータを自治体レベルで組み合わせる分析すれば、こういった家族構成で、こういう税金の支払い方で、こういう健康保険で、こういう病院に通っていてとかいうデータを全部、組み合わせれば、引きこもりがちになりそうな人で、恐らくここにいるだろうという人をピンポイントで見つけられるだろうから、国レベルでは難しいでしょうけれども、自治体レベルで、こういった取り組みをして、深刻な状態になる前に支援に、あるいは社会参加に結び付けられるようなことができたらいなという夢を抱いております。私のほうは以上になります。

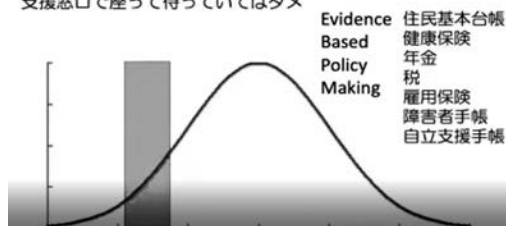


## 『生』に寄り添う社会福祉 お仕事編



## ひきこもりがち 100万人

手帳無し、就労困難、引きこもり、社会的孤立  
いわゆる「中間的就労」を必要とする人々への  
支援のための人件費・事業費を出す制度は無い  
SOS発信はしない  
支援窓口で座って待っているのはダメ



**菱沼** ご報告ありがとうございます。報告の中で、とにかくお一人お一人の望む生活を支えていこうというところでの取り組んでいращやること、またはそこが職員さんの生活も支えていくことになるというところまで触れていただいたかと思います。また、今のスライドでいくと、相談に来る方は相談できる力のある人たちです、そこにつながらない方々はどうするか。地域アセス

メントによって地域に埋もれているニーズに、その方々にアウトリーチしていこうという、その姿勢、とても素晴らしいなと思って聞かせていただきました。ありがとうございました。

続きまして、では酒寄さん、お願いします。

**酒寄** 茨城県にありますが社会福祉法人芳香会茨城県地域定着支援センターの酒寄といいます。よろしく願いいたします。

私、両親から、酒を持って寄り合って、そこから多くのことを学びなさいというふうに名前を付けていただきまして、そういったところは得意なのですけれども、アカデミックなところで何かを学ぶということが不得手なものですから、こういった場、きちんと役割を果たせるかどうかなんですけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

ではスライドを、『生』に寄り添う社会福祉～地域生活定着支援センターの実践からの学び』ということで発表させていただければと思います。今日、前段ではまず地域生活定着支援センターの概要と、あと主な対象者であります罪を犯した障害者・高齢者の現状をさくさくっとご紹介させていただいて、私が何をしているのかということをご説明させていただいた上で、後段で地域生活定着支援センターの実践から私が学んだことというか気付いたことで、最後に本日のテーマであります私が考える『生』に寄り添う社会福祉』ということについて少し述べさせていただければと思います。

まず最初に、罪を犯した障害者・高齢者の支援をしておるんですけれども、いわゆる矯正施設ですね。刑務所とか少年院の中の対象者がどうなっているのかということを中心に簡単に触れていきたいと思います。まず最初のグラフが、矯正施設新規入所者能力検査値というふうにあります。これは法務省のデータからいただいたものなんですけれども、少年院とか刑務所に入ると、全ての対象者の方が何かしらの形で能力検査を受けます。その結果と

いうことですが、グラフがちょっと小さくて申し訳ないのですが、水色の部分が測定不能、それからオレンジの部分がIQ49以下、グレーの部分がIQ50台、黄色の部分がIQ60台ということになっていて、一般にIQ70を境にして知的障害というふうに言われるんだと思いますので、例えば刑務所の中、IQ70以下の方を拾うと22.4パーセントぐらいいるということが、ここからご理解いただければと思います。

次が、そのIQ69以下の新たに入ってきた人たちの罪状、どういったことで刑務所に入ってきたのかというグラフになります。一番大きいところが窃盗ということになります。窃盗といってもいろいろあります。空き巣とか、そういったこともありますし、自動車盗みとか、そういったこともあるのですが、IQ69以下の方の窃盗というと、食料品の万引だとか、あるいはファミリーレストランなどでの無銭飲食とか、そういったことが非常に多いと。いわゆる困窮だとか貧困を背景にした罪状が非常に多いというふうにされています。

次が、矯正施設新規入所者の年齢構成ということになっています。ぐるっと回って、時計でいうと11時から12時くらいの部分が年齢が65歳以上の方、濃い青の部分が65から69歳、緑色の部分が70歳以上ということになります。あくまでも新たに刑務所に入ってくる方ということに限ってなんですけれども、12.9パーセントが65歳以上の高齢者ということになっています。実際、刑務所の中、よく高齢化しているというふうに言われますけれども、12.9パーセントしかないのかというと、そういったことではなくて、長期刑などで刑務所の中に入っていて、刑務所の中で高齢者になってしまう方も、これ以外にいらっしゃるわけですので、刑務所の中、相当、高齢化しているということが、ここからもご理解いただければと思います。

高齢者、なんで刑務所に、65歳以上の高齢者

が刑務所に入ってくるのかというところ、次が罪状ということになります。ここも一番大きい水色の部分、67.1 パーセントというふうに書いてあるのですが、ここが窃盗になります。IQ69 以下の方と同様に、高齢者の場合にも、ここでいう窃盗は空き巣とかそういったことではなくて、いわゆる食料品の万引だとか、そういったことが多いとされています。こういった形で、軽微な罪と言ったらあれですけども、万引とか、そういった経済的に困窮している状態、あるいは貧困の状態などを背景にして、そういった罪で障害を持っていると思われる方、あるいは高齢者が刑務所に毎年毎年、新たに入ってきているというところを一つご理解いただければと思います。

こういった現状に対して、厚生労働省のほうで平成 21 年につくられたのが、私どものような地域生活定着支援センターというところになります。各都道府県、基本的には 1 カ所の事業、北海道だけ広いので 2 カ所あるのですけれども、各都道府県に 1 カ所ずつ整備されておりまして、ここに描いてあるイラストのような業務を行っています。このイラスト、上半分と下半分に見ていただければと思うのですけれども、上半分がコーディネート業務というふうに書かせていただいております、時系列でいいますと、対象者の方がまだ刑務所とか少年院にいる間に行う業務ということになります。

今、矯正施設はどこでも、社会福祉士とか精神保健福祉士を持った職員が配置されておりまして、まずその職員が刑務所の中、少年院の中で、この人、障害があるのではなからうか、あるいはこの人、高齢者で、出た後、支援が必要になるのではなからうかということをピックアップします。矯正施設の中の、そういった福祉専門職が対象者の方をピックアップしますと、これも各都道府県にあります保護観察所という所に連絡が行きまして、保護観察所の保護観察官が矯正施設のほうで、その対象者とおぼしき人と面接をして、こ

の後ちょっとご紹介させていただきますが、一定の要件に該当すると、私どものほうに支援が必要な人がどこで刑務所にいます、については支援を開始してくださいということで依頼が来ます。すると、われわれのほうで、大体、出所前、半年間ぐらい時間をいただくんですけども、矯正施設のほうに足を運びまして対象者の方と面接して、説明、そしてプランニングして、サービスの利用調整をしていくということになります。

続いて、下半分がフォローアップ業務というふうに書いてありまして、これが時系列でいうと、対象者の方が刑務所とか少年院から出てきた後の業務ということになります。刑務所出所の日、主に満期出所ということになるのですが、満期出所の日、われわれのスタッフが刑務所、少年院まで対象者の方を迎えに行きまして、事前に調整させていただいた福祉の事業所、ここでいう福祉の事業所というのは入所型の施設であったりグループホームであったりするわけですが、そういった所に対象者の方をお連れしますということになります。そこで、お連れしたら終わりではなくて、その後、継続して、僕の前に発表のあった譲さんの施設でも、対象者の方、何人も入所させていただいておるのですけれども、そういった施設のほうに定期的に足を運びまして、何か問題はないかとか、そういったことで面接をさせていただくというようなことを行っております。一応こんなことを行っています。

ここに、ざっと対象者について書かせていただきました。ここに六つほど要件が書いてあるのですが、この六つの要件、全てを満たした方を保護観察所で支援対象者というふうに認定していただいて、私どものほうで支援をしていると。主立ったところでいいますと、1 番目に高齢者もしくは障害があると認められる方、2 番目に刑務所とか少年院を出た後に住む所がない方という要件があります。なので、私のほうで福祉サービスの調整をさせていただくといったときに、主に住む所、

障害者のグループホームであったり、養護老人ホームであったり、救護施設であったり、そういったところを調整させていただいているということになります。

なかなか分かりにくいところもあると思いますので、実績とか、そういったところを見ながら簡単に実情をご紹介させていただきます。平成21年に厚生労働省の通知で始まったセンターですけれども、茨城県の場合は平成22年の11月に茨城県から委託を受けまして、私ども社会福祉法人芳香会という所でセンターを開設させていただきました。これ、毎年、新たに支援依頼が来ている数ですけれども、並べますと、年間、大体20人くらいの新たな方の支援依頼が来ているということになります。

これが対象者の内訳ということになるのですけれども、ざっくり言いますと、上半分が高齢者、下半分が3障害の方ということになります。大体、総数218あるのですけれども、65歳以上高齢者が113、3障害の方が105ということになりますので、高齢者と障害者、大体、半々ぐらいの方を支援させていただいているということになります。

うちで支援させていただいている218人の方の内訳ということになります。まず左側が罪状の内訳ということになります。上から足していくと218を超えちゃうんですけれども、例えば空き巣なんかに入ると住居侵入と窃盗ということで二つ付いちゃったりしますので、積み重ねると218を超えますが、うちで支援している方の6割以上が窃盗や窃盗未遂、次に多いのが詐欺、詐欺未遂、詐欺というのは無銭飲食とか、そういったことが多いんですけれども、そういった方が対象になっています。

右側が、上が最高入所度数と平均入所度数というふうに書いてあります。最高入所度数、28というふうに書いてありまして、28回も刑務所に入っている人ってどんな人なのだろうと思って、

どのぐらい悪いのかと思って最初は緊張して行っただんですが、会ってみたら普通のおじいちゃんでした。よくよく考えると、何か重い罪を犯して28回、刑務所には入れないわけで、万引とかそういったこと、細かい短い刑の罪を28回、重ねてしまっているということになっています。うちの支援している218人の方、平均すると、うちに支援依頼が来たとき、大体、6回目ぐらい、5.9回目という数になっています。その下が知能指数になります。一番右が平均の知能指数58.3とありまして、ここからも軽度の知的障害をお持ちの方が多いということをご理解いただけるかと思います。

これがうちで行っていること、調整内容ということになります。うちは社会福祉の一つのサービスというか機関として、そういった罪を犯した障害者・高齢者に対して福祉サービスの支援を行っているわけですので、上半分にあります福祉・医療の調整、手帳を取ったりだとか、介護保険の要介護認定の申請をしたりだとか、障害者であれば区分認定申請の代行、調整をしたりだとか、そういったところが業務の中心になります。ただ、下半分、福祉サービスを利用するのにはどうしてもお金が必要になります。そのため、年金が取れる方であれば年金の受給の調整をさせていただいたり、あるいは取れない方だと生活保護の相談をさせていただいたりします。

それから、今、福祉サービスを利用するのは、どうしても住所が必要になります。私どもの対象者でいうと、大体2割ぐらいの方が、住民票がなくなっちゃっています。刑務所を何度も出入りしている間に、例えばアパートとかに住民票を置いていても、税金を滞納していて市役所の方がアパート訪ねてみたら、なんだ、いないじゃないかということで職権消除されちゃったり、ということになります。住民票が職権消除されちゃうと、介護保険が典型ですけれども、どこの市町村に相談、要介護認定の申請をしたらいいのか、あるい



は障害福祉サービスの援護の実施もどこの市町村にしたらいのかということが問題になってきますので、その辺の調整から進めなければいけない。

あとは刑務所を何回も出入りしていると、当然、家族との縁も切れちゃいます。ご家族がいるというふうに分かって、こちらからコンタクトを取っても、あいつ、うちの人間じゃないからというふうに言われてしまって、例えば施設を利用するのに必要な身元引受人になっていただけなかったり、そういったことも出てしまいます。そういった調整も今もさせていただいています。

実際に関わっていただいている機関が、一応こういった形になります。残り時間が少なくなってきたのですが、ここからが一応、本題といえますか、私がこの地域生活定着支援センターの実践から学んだことというか気付いたことを少し書かせていただきました。まず、うちの対象者のうち 65 歳未満の方は、一応、障害者という区分で支援依頼が上がってくるわけですが、その中で IQ69 以下の方で特徴的な数字を少し拾ってみました。

一つが、IQ50 台、60 台のいわゆる軽度な知的障害の方が、その 65 歳未満の方の対象者の中でも 50.5 パーセントを占めていまして、非常に軽度な知的障害の方が多いということが 1 点。それから、2 点目に障害を有すると思われるということで支援依頼が上がってきて障害者として支援を行っているのですが、実に 60.7 パーセント、6 割以上の方が手帳の取得歴がありません。それから三つ目に学歴をちょっと拾ってみますと、63.6 パーセント、同じく 6 割以上が中学校卒業ということになっています。

障害をお持ちということで支援をさせていただいているのですが、特別支援学校であったり養護学校であったり、そういった所を経ている人は本当に 1 割にも満たないという状況でした。中学校卒業で皆さん、その後どうしているのかというと、学卒時、福祉系の就労支援事業所に行ったりです

とか、あるいは一般企業に障害者雇用という形で働いている方はほとんどいっしょらなくて、実はほとんどの方が一般就労、かつ土建業であったりとか製造業であったりという第 2 次産業というのですか、そういったところに従事している方が非常に多くて、うちの対象者でいうと 84.1 パーセントというふうになっています。ところが、学卒時には、例えば中学校卒業なら中学校を卒業するときには、ほとんどの方がそういった形で一般就労という形で職に就いているのですが、犯罪を犯して刑務所に入る時点では、75.7 パーセントの方が無職ということになっていました。かつ 3 割以上の方はホームレスという状況にありました。

一応こういった状況から、どんなことが分かるのかなというのが若干、拡大解釈している部分があるので、ごめんなさい、そこはご容赦いただければと思うのですが、今のよう数値を拾ってくると、一つ典型的な例として分かってくるのが、例えば軽度の知的障害をお持ちの方が、何の支援を得られないままに中学校を卒業して一般就労するものの、例えば仕事が覚えられないとか、コミュニケーションがとれないとか、そういった理由で離職とか転職を繰り返して、気が付けば無職、あるいはホームレスな状態になってしまっているということが言えるのかなというふうに感じています。

そんな生活をしている間に、いつしか寝る場所にも困らなくて、食べるものにも困らなくて、必要最低限の医療が受けられて、知っている人も大勢いる刑務所のほうが、そういった方たちにとっては居心地のいい場所になってしまっているのではないかとこのところになってしまっていると感じています。先ほど譲さんのお話にもありましたが、生きづらさを抱えた人たちにとって、いつしか地域社会よりも刑務所のほうが居心地が良くなってしまっているということが実情なのだろう、実情というか垣間見えるのではないかとこのように感じています。

地域社会が刑務所よりも反対に言うところの居心地が悪いというふうに言われてしまっているわけで、この状況をソーシャルワーカーとしてどういうふうにかえるかということが、われわれに突き付けられた課題なのかなと思います。先日の埼玉県川越市だったと思うんですけど、ネットカフェで立てこもり事件があって、その容疑者として逮捕された方は刑務所に戻りたかったというふうにおっしゃっているんだと思うんですけど、刑務所よりも居心地の悪い地域社会、これをどうにかしないといけないかなと思っています。

最後に、ちょっと時間が過ぎちゃっているんですけど、社会の中でさまざまな課題を抱えてしまう人が感じている生きづらさ。この生きづら

さに気付いて関わりを持ってネットワークの中で支援していくということがソーシャルワークの実践なのだろうと思っています。そして、その生きづらさに寄り添って伴走して社会全体で包摂していくことが、ひいては生きづらさを抱えた人だけではなくて、全ての人の人権が尊重されて自己実現できる社会を創造していくことにつながっていくだろうと思っています。

今回、与えられたテーマは『「生」に寄り添う社会福祉』というところだったんですけど、私にとって生に寄り添う社会福祉というのは、イコール生きづらさに寄り添うということなのだろうと考えております。すいません、拙い発表だったのですが、以上とさせていただきます。

## 「生」に寄り添う社会福祉 ～地域生活定着支援センターの 実践からの学び～

社会福祉法人 芳香会  
茨城県地域生活定着支援センター 酒寄 学  
(学部36期・院前14期)



HOKOKAI human services Group

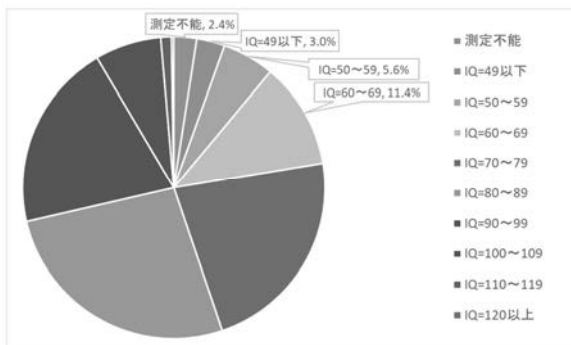
## 本日の発表の内容

- ▶ 罪を犯した障害者・高齢者の現状
- ▶ 地域生活定着支援センターの概要
- ▶ 地域生活定着支援センターの実践からの学び
- ▶ 「生」に寄り添う社会福祉

## 罪を犯した障害者・高齢者の現状①

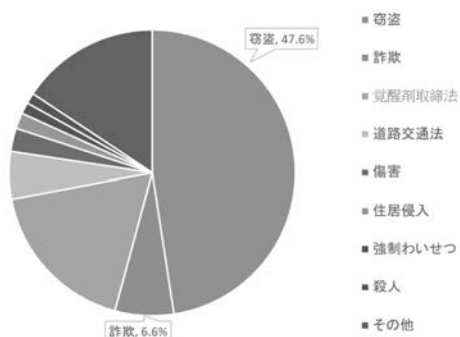
- ▶ 矯正施設新規入所者 能力検査値（法務省「令和2年矯正統計年報」）

⇒ **IQ69以下（測定不能を含む）が全体の22.4%を占める**



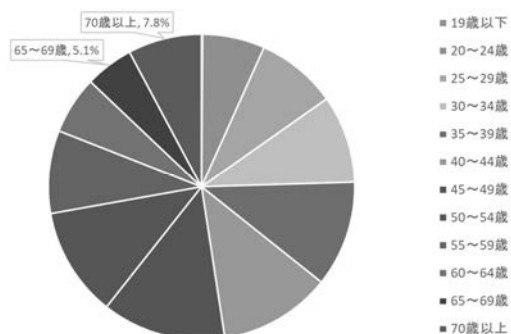
## 罪を犯した障害者・高齢者の現状②

- ▶ IQ 69以下の受刑者 罪状別内訳（法務省「令和2年 矯正統計年報」）  
⇒ 「窃盗」「詐欺」がIQ 69以下受刑者全体の54.2%を占める



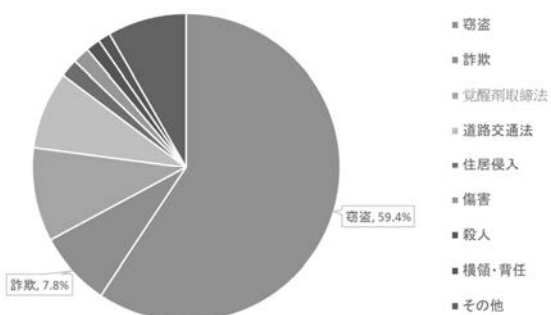
## 罪を犯した障害者・高齢者の現状③

- ▶ 矯正施設新規入所者 年齢構成（法務省「令和2年 矯正統計年報」）  
⇒ 矯正施設新規入所者の12.9%が65歳以上高齢者



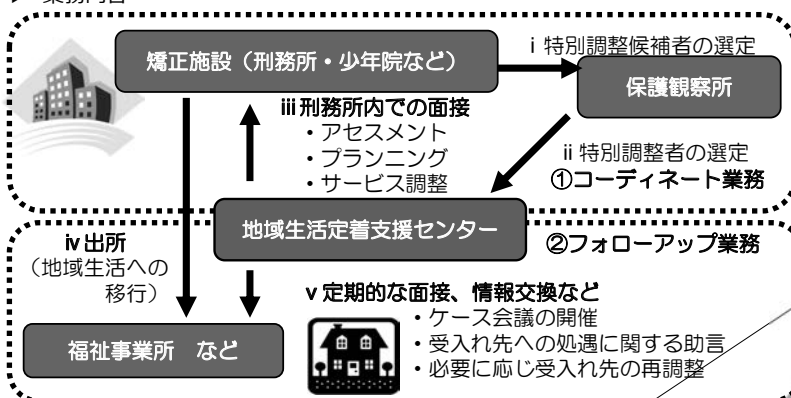
## 罪を犯した障害者・高齢者の現状④

- ▶ 65歳以上新規入所者 罪状別内訳（法務省「令和2年 矯正統計年報」）  
⇒ 「窃盗」「詐欺」が65歳以上新規入所者全体の67.1%を占める



## 地域生活定着支援センターの概要①

### ▶ 業務内容



## 地域生活定着支援センターの概要②

### ▶ 主な支援対象者となる「特別調整対象者」

現に矯正施設に入所しており、以下の**すべての要件を満たす者**

① **高齢（おおむね65歳以上）または障害を有すると認められる者**

② **矯正施設退所後に住居がない者**

③ 矯正施設退所後に、健全な社会生活を営む上で、福祉サービスの利用が必要であると認められる者

④ 円滑な社会復帰のために、特別調整の対象となることが相当であると認められる者

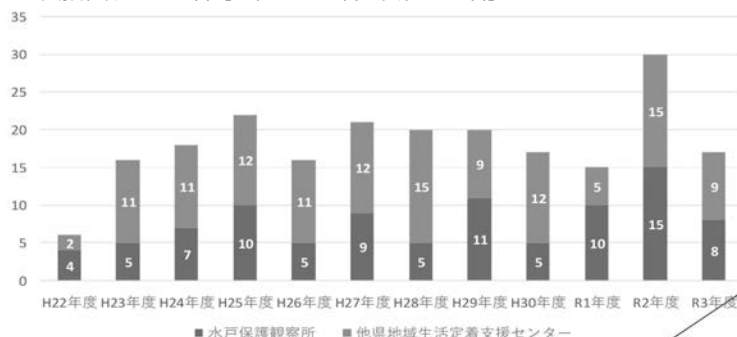
⑤ **特別調整の対象となることを希望している者**

⑥ 特別調整を実施していく上で、必要な範囲内で関係機関に対して個人情報提供されることに同意している者

## 地域生活定着支援センターの概要③

### ▶ 支援件数（特別調整対象者のみ）※平成22年11月～令和4年3月

支援総数218名【男性205名 女性13名】



## 地域生活定着支援センターの概要④

### ▶ 対象者の分類

対象者の内訳	県 内 調 整	県 外 調 整
高齢	45名	33名
高齢知的	9名	4名
高齢精神	5名	1名
高齢身体	12名	4名
知的	44名	17名
精神	16名	14名
身体	10名	4名
<b>合計</b>	<b>141名</b>	<b>77名</b>

## 地域生活定着支援センターの概要⑤

### ▶ 罪名及び入所度数と知能指数等

罪名	件数
窃盗・窃盗未遂	139件
詐欺・詐欺未遂	30件
住居侵入・未遂 建造物侵入・未遂	27件
傷害・暴行・傷害致死	14件
覚醒剤取締法違反	12件
放火・放火未遂	8件
強盗・強盗致傷	7件
殺人・殺人未遂	6件
強制性交・強制わいせつ	5件
その他	52件

最高入所度数	平均入所度数
28入	5.9入

知能指数 最高値	知能指数 最低値	平均 知能指数
117	21	58.3

## 地域生活定着支援センターの概要⑥

### ▶ 調整内容

分類	調整内容
福祉・医療	障害者手帳取得（証言者の確保・生活歴の調査・申請付添）
	介護保険要介護認定申請（申請付添・申請手続き代行）
	援護の実施機関（障害サービス）や措置権者（養護老人ホーム）の調整
	医療機関の調整（通院・入院の調整）
経済	生活保護実施機関の調整（生活保護問答集等の解釈のすり合わせ）
	年金申請（申請手続き代行）
生活	身元保証人・身元引受人の調整（親族へのアプローチ）
	住所設定（対象者約20%の住民票が職権消除）

## 地域生活定着支援センターの概要⑦

### ▶ 調整機関

分類	機 関 名		
行 政	市役所・町村役場	市町村社会福祉協議会	地域包括支援センター
	保健所	児童相談所	知的障害者更生相談所
福 社	相談支援事業所	障害者就業・生活支援センター	就労支援事業所
	障害者支援施設	共同生活援助事業所	救護施設
	養護老人ホーム	特別養護老人ホーム	認知症高齢者GH
	介護老人保健施設	サービス付高齢者住宅	軽費老人ホーム
医 療 その他	精神科医療機関	依存症リハビリ施設	依存症専門医療機関
	総合病院	教育委員会・中学校	法テラス
	警察署	無料低額宿泊所	自立準備ホーム



## 地域生活定着支援センターの 実践からの学び①

- ▶ 軽度知的障害（IQ50～69）を有する対象者が多い  
⇒ 65歳未満対象者の**50.5%**が**IQ50～69**
- ▶ 障害を有すると思われる対象者でも手帳の取得歴がない対象者が多い  
⇒ 65歳未満対象者の**60.7%**が**手帳の取得歴なし**
- ▶ 最終学歴が「中学校卒業」である対象者が多い  
⇒ 65歳未満対象者の**63.6%**が**最終学歴「中学校卒業」**
- ▶ 学卒時、一般就労（特に建設業、製造業）している対象者が多い  
⇒ 65歳未満対象者の**84.1%**が**学卒時に「一般就労」**
- ▶ 罪を犯した時点で職に就いていない対象者が多い  
⇒ 65歳未満対象者の**75.7%**が**犯罪時に「無職」**
- ▶ 罪を犯した時点でホームレスな状態にあった対象者が多い  
⇒ 65歳未満対象者の**31.8%**が**ホームレス**

## 地域生活定着支援センターの 実践からの学び②

- ▶ 軽度の知的障害者が、何の支援も得られないままに中学校を卒業し、一般就労するものの「仕事が覚えられない」「コミュニケーションが取れない」等の理由で離転職を繰り返し、気が付けば「無職」「ホームレス」な状態に
- ▶ いつしか「寝る所に困らない」「食べる物に困らない」「必要最低限の医療が受けられる」「知っている人が大勢いる」刑務所が、居心地の良い場所に
- ▶ 生きづらさを抱えた人にとっての居心地の良さ

**『地域社会』 < 『刑務所』**

- ▶ この現実を、ソーシャルワーカーとしてどのように捉えますか？

## 「生」に寄り添う社会福祉

- ▶ 社会の中で様々な課題を抱えてしまう人が感じている「生きづらさ」。この「生きづらさ」に気づき、関わり、ネットワークの中で支えていくことがソーシャルワーク実践
- ▶ 「生きづらさ」に寄り添い、伴走し、社会全体で包摂していくことが、ひいては「すべての人の人権が尊重され、自己実現できる社会」を創造していくことに繋がっていく
- ▶ 「生」に寄り添う = 「生きづらさ」に寄り添う

ご清聴、ありがとうございました。

**菱沼** ご報告ありがとうございます。刑務所で暮らす方々、またそこを出た方々がどういう状況なのか、具体的なお話をいただきました。皆さんの中でも、視聴者の方の中でも、山本譲二さんの『獄窓記』を読まれた方々もいらっしゃるんじゃないのかなと思うのですけれども、そういったところから少しずつ実態が明らかになって、そこから支援の必要性ということで、この定着支援センターが生まれてきているわけですね。きょうの話、非常に考えさせられるのが、地域社会よりも刑務所のほうが居心地がいいというところの言葉ですね。実際、福祉よりも刑務所がセーフティーネットになっているというような指摘もあるわけですね。そうならないようにするにはどうしていったらいいのか、考えていきたいなということを考えさせられました。ありがとうございました。

では、続きまして櫻井さん、よろしく申し上げます。

**櫻井** それでは、実践の説明をさせていただきたいと思います。『「生」に寄り添う社会福祉』、障害福祉事業コンサルという仕事をしています。実践から学びと今後の在り方についてという発表をさせていただきます。私ですが、ちゃんとした障害福祉サービスの事業を通してきている人間です。初めはヘルパーから始まり、NPO 法人を通して社会福祉法人で、最後は株式を抜けてフリーランスで今、活動という感じになっております。一応、関連企業が8社ぐらいあるのですが、名前を出していいよと言われたのが3社だけだったんで、そこに書いてある、このプラスあと5社いただけたらと思いますね。まず資格のほうが、いろいろ持っていますが、メインのものは社会福祉士、精神保健福祉士、そういうところなんです。主な業務なのですが、私、いろいろ事業をやったものから、ここに書いてある大体の障害福祉サービスの経験があって、その中で管理者経験もあって業務に関しては割と分かっているほうかな、自分ではそういうふうに思っております。そこから障害

福祉サービスのコンサルをやるに当たって、こういったことを自分の中でコンセプトとして考えております。社会問題を事業や仕組み化を通じ、できれば解決することによって、お客さんを成長させたりとか、利用者さんを成長させたりということをコンセプトに仕事しております。

では、今、行っている兵庫県のほうの実践の報告をさせていただきたいと思っているのですが、まず兵庫県播磨地域での実践報告という内容になっております。どこでやっているのかなというのと、地図でいう茶色い辺りですね。茶色い辺りが、ちょうど播州という地域になりまして、そちらのほうで、姫路市、加古川市、高砂市、明石市ですね。あとちょっと離れるのですが、神戸西区という所で事業しているお客さまの話です。

お客さまの情報なんですけど、一応、全てしゃべっていいよと言われているので、概要だけですね。もちろん株式会社で、かっこ営利法人というところですね。2019年より障害の事業部を立ち上げておりますと。もともと会社のオーナーの方、MY会社の取締役さん、超大手です。ちょっと書けないのですが、超大手です。残りの余生は社会貢献・福祉事業をしたい。ちょっと体を壊しまして現役を離れたとき、こういうことを思ったところなんです。サラリーマンとして、資産家とか成功された方で、社会貢献したいのだけど、どうやってお金を使っていいかわからないという方、結構いらっしゃるんですね。そういった方で、ちゃんとお話をしてというところで、このところ、契約をしていることが多いのです。あと、自分の元部下に終身できる仕事を提供したいと。もともとやっていた仕事ではなくて、新しい仕事で何かいい仕事ないかなというのを提供したいなんていう思いもあったそうです。いろいろお話をさせていただきましたが、福祉にご理解をいただけるということで確認して契約になりましたということで、今に至ります。

そこからなのですが、どんな事業をしているの

かということですけど、普通のグループホームですね。共同生活援助の設置をはじめ、加古川市、姫路市と設置を増やしていきましたと。現在、明石市で29部屋、加古川市で25部屋、姫路市で18部屋、計72部屋ですね。ただ、これは法人が事業を開始したのが19年なので、そこから22年までなので、かなりの急成長ではあるなということですね。2022年末には訪問看護を立ち上げという形になっております。

そこから、どういった方を相手にしているのかなと、福祉経験ゼロだよなという方たちなのですが、対象者は、区分というものがございしますが、そこから1から5の方までということで、中身は精神障害の方とか、知的障害の方と、身体障害の方。身体障害といっても、車いすではなくて歩けると。あと難病の方などなどというふうになっております。

そして、事業として成り立っているのかということがあります。もちろん、しっかりコンサルさせていただいているので成り立ってはいるのですが、もともといろいろと営業能力とかある方たちなので入居率も高いと。86パーセント、稼働率も84パーセントで好調です。事業部発足1年目、帳簿上は黒字になっておりますよと。社長、部下とも、先ほども言ったとおり、営業ベースの会社だったため、営業能力やサービスマインドは非常に高いですと。福祉事業家よりも、全然、高いです、その辺は。3年目になるが、虐待、類似案件はゼロというところですね。この辺もしっかりと研修させていただいているので、なかなかいいケースになったのかなというところですね。ご利用者からクレーム対応、とにかく早くて、この辺は一般企業の知恵なのかなというところですよ。あとドミナント戦略が非常にうまくいっているというところですね。ドミナント戦略をするに当たって、事業所を出店する地域のリサーチをちゃんと行っているというのもあります。

もちろん、ウイークポイントもあるわけです。弱点もあるわけです。ゼロの人たち、知識はあれ

ど、知識というものがなかなか出てこないことが多くあったので、研修の回数は非常に多かったところですね。新人育成、教育・育成するのが大変だったことというのが一番かなと思います。ただ、リモートがかなり使えたので、これを、回数を増やすことによって、うまく補えたかなというところがありますね。事例の蓄積がもちろんですよ。そのため、トラブルがあった場合は現場での即応が難しいので、速攻、電話が鳴りますよ。分かっている人がいる。そこから回答しなくてはいけないということで、なかなかこれも大変だったですけど、たまっていくにつれて、このパターンか、このパターンかといって会社でいろいろと対応ができてくるようになってきて、この仕事が減ってきたところです。

株式会社、営利法人での障害福祉事業だったため、地元の幅を利かせている社会福祉法人に冷ややかな目ですごく見られるというのがありましたね。なんだ、おまえらみたいな、ありまして、相談事業所から、もう来るな、みたいな言われ方をするようなこともあります。一般住宅をグループホームに転用しているため、もちろん車いす利用者の受け入れがちょっと難しいかなというところですね。どうしても1階の一部屋だけで受けられるようなってことはあつたりするのですが、なかなかそういうところが難しくて、今後、こういうところも改善していかなくちゃいけないところなのかなとは思っております。

今後の展望はというのがあるのですが、もちろん事業計画を作成していますので、グループホームだけではないよというところがございます。5年以内に播磨一、先ほど言った播磨地区の1番の事業所になりましょうと。一番サービスのいい事業所になりましょうというのが、そういうスローガンを掲げて運営しております。今年度以内にグループホーム、取りあえず90部屋、設置してしましましょうというところですね。グループホームで外注している事業をちゃんと、就労するので、

就労のほうへ回していきましょうということですね。

外注している事業って何ということですけど、よくご飯を外から、キット化されたものをワンクック作ってなんていうものは頼むことが多かったりすると思うんですけど、そういったものを頼むことをやめて、自社でしっかりといいものを作っていければなとは思っております。それも就労でということですね。今年度中にサテライト、就労B、相談、居宅介護を開設はするのですが、付加してグループホームで必要なサービスというところで行っているので大したことはないよというところですね。ただ、この就労Bをお金の稼げる場所にしっかりとしていくところが重要かなとは思ってまして、ここが、非常に力がかかるところかなとは思っております。そのときなのですが、明石市の結構、有名なウイスキーメーカーがあるのですが、そことコラボ商品の開発を検討していますというところですね。ご利用者の正規雇用も視野に入れて、どんどん展開していきましょうというところですね。

この流れから、グループホームをつくることによって、一応、生きる、生活するという仕組みを加速させていきましょうというふうに動いています。その後、就労の展開から商品の販売することによって強制的に、できれば何か、この後、説明するのですが、マークなんかを作って、これを買えば社会貢献になりますよなんていう形で仕組みができればいいかなとは思っております。そこから理解者を増やす。要するに本当に福祉を知らない人たちに業界にどんどん入ってきていただいて、社会問題を物量で解決してしまおうかな、そういう仕組みもつくればなとは思っています。そこから、また商品の話ですけど、魅力ある商品を作りたいですよというのが一番ですよ。できればコンビニに並ぶようなものというのが作れば、皆さん、手に取って買って見たら、一応、社会貢献しているよ。なんていう商品がで

さればとは思いますが。その中から数々の仕組み化による社会問題を解決するためのパッケージができていけばなというところ、これは僕の思いでもあったりします。

次です。先ほどの商品の展開方法のお話なのですが、こちら、たばことかに、今、喫煙はあなたにとって肺がんの原因の一つになりますなんて、こういうセンセーショナルなことが書かれていたりするんですけど、これってこういうふうに、この商品を買うことにより社会貢献につながります、なんて書かれていると、おっちょっと思ったりすると思うんですよ。こういうエシカルマークといういろんなマークがあると思うんです。フェアトレードのマークとか、リサイクルのマークというのがあると思うんですけど、こういったマークにマーク化できれば、もうちょっと商品が分かりやすくなるかなというところですね。なので、こういう展開をしていきたいなとは思っているんですけど、なかなか、これに続く商品ができればなというところでもあったりします。

そこから、事業や仕組み化を通じてクライアントを成長させて社会問題を解決する活動をしていきたいところが僕の最終的な目標で、その次、古めかしいことを最新のようにブランディングして差別化を図り、大したことをしていないのに素晴らしいことのように繕うというのはやめていこうか。古めかしいことを最新のようにブランディングして差別化を図り、大したことをしていないのに素晴らしいことのように繕うのはやめていきたいなというところですね。

これ、僕も社会福祉法人のときよくやってたんですけど、施設だけ新しくして、実は中身が何も変わっていない。20年来同じようなことをしているんですね。さも良いことだ。みたいなブランディングをして説明したりすることをしていたので、こういったことをどんどん減らしていきたいなというところなんです。なので、あちこち地方で仕事をするようになってから、いろんな法人さん

を見させていただいているのですが、これ俺もしていたな、みたいな。施設だけ新しくて見学とかに対応していただけるのですが、やっていることはなんか20年前と変わらないねみたいなのを何とか変えていけばな、とは思っております。

商いを通じて、さっき商品販売したいと。一般流通に耐え得るものを作っていって、もうちょっと簡単に社会問題の解決を加速させる仕組みをつくっていけばなというところなんです。なので、一つの作業をやったら何銭とか1円とかいうものではなく、できるだけ普通に皆さんが手に取るようなものができていけばなというところですね。以上で私の発表を終わります。ありがとうございました。

**菱沼** ご報告、ありがとうございました。お話を伺っていると、ニーズに応えていくというのは株式会社であっても社会福祉法人であっても、そこは同じなのだと思うのですよね。むしろ、マーケティングとか、市場調査とか、より敏感に人々の声を聞いていこうとするというところは民間企業の方々も持っていらっしゃるのだと思うのですよね。コラボの話は、これは午前中の雄谷さんのお話にもつながってくるところだと思うのですけれども、ニーズとニーズを結び付けていくというところが新たな可能性を広げていく、それが社会問題の解決にもなっていくというところにもつながるかなと思って伺っておりました。ありがとうございました。

それでは藤野さん、よろしくお願いします。

**藤野** テンション上げていきましょう。自己紹介させていただきます。私、東京都の清瀬市という所、ここの町にありますビーサイドユー株式会社の代表で藤野と申します。学部の46期生で、今年でちょうど40歳になる年なんですけれども、まだまだこれからやりたいことはいっぱいあるんですが、きょう『生』に寄り添う社会福祉』と

ということで、私たちの実践をご紹介させていただけたらと思います。

テーマとしては、そのままでございますけれども、私たちもいろいろなチャレンジをしてきた事業所です。そのチャレンジを阻む障壁というのが数多くありました。そして、その越え方というのも具体的にきょうはお話しできたらなというふうに思っています。障壁を考えるとときに、実は3年前に私たち、譲さんとも佛子園にお邪魔しまして、雄谷さんと一緒にお酒を酌み交わさせていただいたときに、僕は、どうしたらこういう事業ができるのですかというふうに簡単に聞いてしまったのです。そう考えているからできないんだよ、と言われてまして、ものすごく衝撃的で。私、本当に実践を自分自身がチャレンジしていると思って、そして制度を超えてチャレンジしていると思ったら、その自分が一番、制度にはまっていたという、本当に井の中のカワズ大海を知らずという、雄谷さんとは、それ以来お付き合いをさせていただいております。先日も新しく鳥取県に開所しました法勝寺のほうに行ってきました、佛子園のモデルが実際に実践されている姿を目にしてきて、大変勉強になりました。では、私たちの実践をご紹介させていただきます。

会社紹介です。私たち2009年、今年で13期、ちょうど終わるところですが、清瀬市の最初は南口ふれあいどり商店街という所で事業を開始しました。単純に言えばヘルパーステーションです。ただ、24時間、訪問をするという、当時、介護保険は24時間サービスというのはなかったので、障害者のサービスは、実は24時間訪問派遣というのができる制度でありました。当時から重度の身体障害の方への重度訪問介護というのを始めておりまして、あとは強度行動障害の方々へのお出掛け支援、行動援護であったり、ご自宅での食事を作ったり入浴をフォローしたりという居宅介護事業をやらせていただいております。

今日本題になるのは、共同生活援助の事業でござ

いまして、私たちは強度行動障害の方々安心して住める居住の在り方ということをずっと挑戦してきました。私たち、主たる対象者ということで、重度の身体障害者の方、そして児童を含めて重度知的障害児者を、このエリアで約130名前後のご利用者さまにサービスを提供させていただいています。従業員は、フルタイムの職員さんで約30名、契約社員さんで約7名、約40名ぐらいの常勤スタッフでやらせていただいているんですが、特徴的なのは男性の比率が高いということです。どうしても介護保険の事業ですと女性の職場というイメージが強いのですが、私たちは長時間介護、かつ深夜帯の仕事も含むので、男性の安定した職場というところになりやすい業種なのですね。なので、定職される方々の多くが男性の方というのは、非常に在宅介護では珍しい事業形態かと思っています。提供地域ですが、清瀬市を中心に隣接している市町村になります。北多摩地域が中心ということになります。後ほどグループホームができた背景なんかと絡んできます。次のお願いします。

『生』に寄り添う社会福祉』アクションということで書かせていただきました。強度行動障害を抱える最重度の知的障害者の方および自閉症者への共同生活援助事業に挑戦ということで、ここでは過齡児問題、強度行動障害、そして重度訪問介護というのをキーワードに挙げさせていただきました。ここでまず強度行動障害というのはどういう方々のことを指すのか、次のページで紹介させていただきます。

強度行動障害は、自分の体をたたいたり、食べられないものを口に入れたり、危険につながる飛び出しなど、本人の健康を損ねる行動、他人をたたいたり物を壊す、大泣きが何時間も続くなど、周囲の人の暮らしに影響を及ぼす行動が著しく高い頻度で起こるため、特別に配慮が必要な方々、もしくはその状態のことをいいます。こう言うと、すごく凶暴だとか怖いというようなイメージ

が付いてしまう。これは言葉のニュアンスというんでしょうか、表現がそうになってしまうのが非常に申し訳ないですけど、事実このような状態の方々を指します。この方々が、多くがどこに住んでいたかという、先ほど来、出てきました入所施設が多くそこを引き受けてこられました。入所施設も、成人の施設もあれば、児童の施設もあります。歴史からすると、児童期から入って、行き先がなく、その次の行き先がなく、成人を迎えても入所から出られないという状態が長く続いていました。

続いて、次のページですけれども、ここで絡んでくるのが過剰児という問題です。この清瀬の隣町、東京都東村山市には、東京都が以前やっておりました東村山福祉園という児童入所施設があります。こちらは歴史的には古かったのですけれども、児童期、児童期といっても本当に6歳とか、場合によっては1歳、2歳から入所された方が40歳になるまで児童入所施設にいたという、それが社会問題として提起されたのが、ここ数年ありました。平成22年かな、法律改正等々を含めて、児童入所施設からしっかり出て地域に戻ろうよというアクションが起きたのですが、なかなかその施策は進んでおりません。そこで出たのが過剰児という問題でございまして、現に児童入所施設に入所している18歳以上の方々のことを指します。つい最近、3年、4年ぐらい前ですかね。この清瀬市に東村山福祉園で過剰児として対象となっている方々の成人入所施設ができました。そして、東村山福祉園、無事に18歳以下の方々が利用できる施設に変わったんですけれども、実は毎年、1人、2人、発生しております。次の行き先が見つからない児童期の方々です。

なんで見つからなかったかという、基本的には被虐待、いわゆる虐待経験の方々なんです。本人さんの障害が故に、家族での育児、そして介護が難しくなってしまったと。そういう状況の方々ですので、戻る場所がうちではないのです。

そして、入所施設を探せばいいじゃないかというふうな安易な話ではなくて、実はコロナ禍で都外施設を探すことすらできない、そんな状況が毎年のように、大体、17歳になって高校2年生の秋ぐらいから冷や冷やし始めるのですよ。次がないのだけど、どうしようと。そこが本当に、多分、日本全国そうだと思います。こういう方々をどうしようかということで、一昨年、2020年の秋頃に私たちが福祉園さんと協力し合いながら、今後の生活の拠点をつくったというのが始まりです。

強度行動障害の方を地域で暮らせる画期的な仕組みをつくろうということで、どんなことができるのか、アクションの在り方というのを三つのステージに考えたのです。一つは、過剰児問題を解決するアクションとしてやっていこうと。そして、もう一個は、その方々自体が強度行動障害の当事者でありますので、その方々の居住支援を応援するというアクションを考えてみよう。そして、福祉の現場で働く人たちの幸福も一緒に考えよう。いわゆる私たち行動援護をやらせていただいている中で、そして重度訪問介護をやらせていただいている中で、どうしても介護者の疲労、疲弊というのが非常に多くあります。これは介護現場が辛いということではなくて、好きな仕事でも、もし自分がいい支援をしているかどうか迷ったとき、そしてこの支援自身がどういうふうにこれから進むのかと分からなくなったときに、みんな一回、立ち止まってしまうのです。その立ち止まるときに話せる仲間であったり、そして指導をくれる、いわゆるスーパーバイザー、スーパーバイジーという関係がちゃんとつくれるかどうか、ここでもかなり変わってきます。そして、ハッピーにはもちろん経済的な側面もあり、この仕事を将来ずっと長くやっていけるのかどうかという、そういう不安もあります。この三つを掛け合わせると、強度行動障害の方々が安心して暮らせる個別ケアをしっかりと提供できるグループホームをつくろうじゃないかという行動に変わって

いくわけです。

では、実際にそれを実践していく上で大変だったというところ、この三つの壁がありまして、一つは制度の壁です。二つ目は、行政にそれをアプローチするときに起きる壁です。最後は自分の壁という、あえて書かせていただいたのですが、この三つの壁がありました。制度の壁、超え方としては、チャレンジャーはみっちり制度・その仕組みを学んで、制度自体の本質を理解し、その時代に求められる新しい解釈をつくっていきこう。制度にはこう書いてあるけれども、新しい、今必要なのはこういう考え方ではないか。そして、できないとは書いてない。だからやってみようという、そういうチャレンジの思いをちゃんと持っていることです。そして、私たち自身も、もちろん制度の仕事をやらせていただいているので、その制度がどういう背景でできたとか、制度の細かい部分をちゃんと知る情報量はしっかり持っていかなきゃいけないなと思っております。

二つ目、行政、そして交渉の壁というものです。これは雄谷さんが佛子園を、Share 金沢をチャレンジされたときに、恐らく雄谷さんのことなので、直接、国とやりとりをしたと思いますが、私たちは都道府県単位、そして市町村単位が窓口になります。それを認めたくないという背景ももちろんあったと思いますし、ただ認めないからやらない、そこで諦めるのではなくて、チャレンジャーはまず実践し、行動を見せて支援の事実をつくっていきこうじゃないかと。こういう方々がいらっしゃるのだということをちゃんとアピールできる場、それをつくっていきこう。そして、行政が認めたくないのではなくて、認められない背景、実質的には理不尽さをちゃんと理解し、その対策を立てていく。そして、その対策は1人でぶつかるのじゃなくて、時には当事者の方と一緒に行動をしたり、当事者の家族、そして一緒に協力してくれる関係団体さんと情報を共有しながら、自分たちの成果だけにしないという、そういうチャレンジ精神が

とても大事なかなと思っています。

最後に、1番、2番は超えても、自分自身がこれをやり続けられるのか。非常にそういう自分自身との闘いもあります。苦しい経験から、これは自分じゃできないかなと恐らく悩むことはあります。ただ、それを最後まで諦めない。スポ根精神ではないんですけども、諦めたら、そこでゲームセットだよというふうなのは、僕たちはその世代なんで、諦めずにどういうチャンネルでまた挑んでいきこうか。そして、それが駄目でも、また違うチャレンジを探していこう。それを繰り返していくことが、私たちにとって必要な壁の越え方と思っています。

最後に、今、直面している壁です。それでも壁はまだまだありまして、私たち、障害者の方の事業をやるに当たって、制度のこれからというのをよく研究しなければなりません。つい最近も、障害者総合支援法の改正法施行後3年の見直しについて、という国のこれからの方向性を示した資料が発表されています。これを端から端まで読み込んで、国の考えていることや、国が目指そうとしている社会ビジョンを実際にどういうふうに具体的に落とし込めるのかというところを分析しています。しかし、国が掲げている大義名分というのは、なかなか都道府県や市町村に下りてきません。下りてこないというのは、教えないのではなくて、まだ勉強するステージにも立っていないのですね。なので変な話、古い制度の考え方で行政の対応をされてしまったり、現状、今この町には足りているからということで本当に拙い対応をしてくる自治体なんかもありまして、非常に苦戦している毎日です。

ただ、しっかり行政の対応自体が正しいのか、そして法的な根拠があった行動なのかということも、私たちは常にチェックしなければいけない立場ですし、時には意見交換という場の中で、その考え方、違いませんかと指摘をすることもあります。ただ、ぶつかってばかりではいいものはつ



くれませんし、いいものをつくるために私たちが行動しているというのが一番、大事ですので、そこはよき理解をどういうふうに得られるかというプロセスを大事にしたいなと思っています。

グループホームのチャレンジと言いながら、グループホームの話あまりしなかったんで、どんな生活をしているかということのストーリーを少しお話しすると、私たちのサービスを利用している方に、とても構造化が得意なこだわりの強い方がいらっしゃいます。その方がホームの近くのファミリーマートにファミチキと、あとは飲み物を買うというのが日課の中に入っておりまして、ただ調子が悪いとファミリーマートの中の棚の商品を一気になぎ払うと。それをあるよということを知った上で、あえて連れていくのですよ。ただ、事前に実はお店の方には相談をしていて、もしこういう行動があったとしても、落ちた商品は全部、買いますので、まずはちょっと見ていてくださいということを事前にアナウンスしながら、案の定してくれたのです。やったよという顔で最初は店員の方も見ていたのですがけれども、よくよく考えたら、全部、買ってくれるんだよなという、ちょっと訳が違います。

ある意味、もちろんやったことはどうかということはあるかもしれないんですけど、その暮らしを見て、実際、こういう方々をフォローする人たちがいて、この方々がいるから彼らは暮らせるという、その事実を見てもらうまでには、変な話、その行動が起こるところを見てもらわなきゃいけない。見たときのフォローをすることで、彼はこの町で暮らす。その実践を私たちは見守る。変な話、周りからしたら、何もしていないじゃないかと。いわゆる、取り押さえろ、みたいなことを言われることもあるのです。だから、それは私たちの本意に反することなので、見守りながら実際にごめんなさいも一緒にします。共生って多分そういうことだと思うので。そこを実践しながら、来るときに、事前に、もしファミチキがなかった

ら本人はもっと困っちゃうから、一回、電話をちょうだいと、揚げたてを用意しておくから。みたいな。結構、よき理解者には実はその店員さんになって、意外に溶け込んでいるなみたいな、そんな実践がありました。

まだ1年間の間のストーリーですけれども、非常に楽しい毎日を、そして一緒に、やらかすけど支えながら、自分の役割を自覚できる場が今できているなというふうに思っております。私のストーリーになっちゃうんで、こちら辺にしておきます。ありがとうございました。

**菱沼** ありがとうございました。藤野さんは清瀬でニーズに基づいて起業されてきているわけですよ。その中で、制度の壁や行政の壁、自分の壁と出してくださったのも、とても重要なところですよ。まさにこれは雄谷さんの午前中のお話にもつながってくるところかなと思います。それをどう取り払っていけるのか。最後のエピソードがとても象徴的で、地域で暮らすと、いろいろ生じることがあるわけです。そこを隠してしまうのではなくて、そこを地域の方と受け止めてもらいながら、どうするか一緒に考えていく。まさに地域の力が高まっていくということになるなということを感じました。ありがとうございました。

今、4名の方々、それぞれ大変な分野で実践報告をいただきました。岡崎さんには、国の動向などを踏まえながら、それぞれの報告のコメントをお願いできたらと思います。よろしく願います。

**岡崎** 今日はお招きいただいて、ありがとうございます。厚生労働省で移行支援専門官をしている岡崎と申します。よろしくお願いいたします。

少し皆さんのお話を聞かせていただいて、まず研修のご案内をいただいたときに、私、生に寄り添う社会福祉の生の部分を勝手に、『キ』って読むときありません？ 生地とか、生の芸術とかい

う、そういう生きるということよりも、ありのままというふうにし少し解釈してしまっていて、ありのままに寄り添う社会福祉ってすごいいいなと思って来たんですけど、あながち間違っていないなというふうに、今、皆さんの話をお聞きして思っております。

そういった中で、各先生のお話から、菊池先生からは所々にナザレ園さんは制度の前から必要に応じてやられていたということであったり、自主事業であったり、公益的取り組みをしているということだったり、利用者さんだったり目の前に困っている人が現れたら、そういった人たちを助けることをしてきたのだなということが伝わりました。そういった中で、最後に引きこもりの方の棒グラフのところですね。この方たちをどうにか、今、何かが起こる前に助けることができないかという、今後、そういった方たちが見えてきているのに、そういった人たちをどうやって救えるかという予防的な対策を少し提案というか宿題として出されたかなと思っております。

酒寄先生からは、刑務所よりも居心地の悪い地域社会、逆に言えばということでおっしゃってくださっていましたが、一つの側面として、そういった方たち一人一人が地域社会につながっていく手助けをしていかなければいけないという宿題と、もう一つは、その方たちがつまづく前に、こちらも予防的な対策だと思うんですが、その方たちが困り感を抱え始めたときに助けることができないかというようなことを宿題としておっしゃったかなと思います。

櫻井先生からは、事業を始めてから仕組みをつくっていった。研修であったりとか、事例に合わせて対策を考えていった。そういったことというのは各施設さんも情報として欲しいというか、こういったことは汎化できることだと思いますので、ぜひ積極的に皆さんに教えていただければという辺りと、グループホームであったりとか、就労事業所の拡大をニーズに合わせてされていくと

いう辺り、最後には施設に対して少し課題を投げ掛けられたかなと思ひまして、利用者さんの権利ということ考えたときに、施設の中での権利をどう保障するかということだけじゃなくて、その方はあくまでも施設で生活しているのではなくて社会で生活しているわけなので、社会の中でその方の権利をきちんと考えるという視点を少し宿題として投げ掛けられたかなと思っております。宿題として、その宿題がどこで解決するのかというのは、多分ここではないような気がして申し訳ないなと思っているのですが、いろいろ検討させていただければと思っております。

最後に藤野先生からは、強度行動障害の方たちを応援したいというのと、強度行動障害の方たちを支える職員を応援したいということが少し話されておりました。まさにその通りだなと思います。強度行動障害の方を支援する方が少し助けを求めたり、強度行動障害の方のことをより皆さんが分かってくれたりという、そういうネットワークの仕組みがつくられることがどんどんされていけばいいなというふうには思っております。そういう中で、自分の壁というのと行政の壁ということで、私も藤野さんの壁だなと思って話を伺っております。藤野さんは、諦めずということをお話して、まさにそのとおりだなと思っておりました。

私が要項をいただいたときに少しお話しできればというふうに思っていたことがあって、サービスという一つ一つのものに区切らなければ、福祉ということで、そもそも何だったのだろうということかなと思ひていまして、福祉って何という、一人一人の幸せの実現というところなのですよ。でも、一人一人の幸せって、一人一人、100人いれば100人違うという、一つそこが前提にあるのと、あと福祉というのは、特定の限られた人のものでなくて全ての人が必要としていることなのですよ。そしたら支援されることもそうですし、支援することも、今、日本にいる全ての方が、それをなし得ることになると考えると、すごい可

能性は無限大だと思うところなんですけど。人は1人で生きるのは難しいので、誰かに自分がどこかに頼ったり、依存先を広げながら生活していくのかなと思うんですけど、そういったところで、どうやってそういう輪が広がっていくのかということが一つあるかなと思います。

私はもともと子どもの支援が専門だったので、少し子どものことでいうと、子どもに支援計画をやるよといって、やりますって楽しむ子どもっていないです。遊んでいたら自然と身に付いていったみたいな、そういう感じだと思うのです。午前中の雄谷先生の講演というのはまさにそうで、いろんなものをつくっていったら、そこに意図はもちろんあったと思うんですけど、自然と人がつながっていったりとか、こちらが予期しない想像もしないような利用者さんの回復があったりということが行われたというところがあると思うのですね。皆さんのお話を聞いていると、今も、そういった難しい状態があって、その難しい状況を変えなきゃいけないというようなことって、結構、アクションするのが難しいなと思っておりまして、それを変えるためにやりますといっても、なんか変わるでしょうみたいな感じのことがあるとすれば、やってみて、そこに人が集まって自然と変わっていったというような流れができれば、自然と共生社会が生まれていくことにつながるのかな、みたいなのを少し考えておりました。

なかなか権利の問題ってすごい難しいなと思っておりまして、今日の皆さんのお話を聞くと、大きく三つ。一人一人の社会参加の権利というところがどうなのかという辺りと、一人一人がつまずかない社会づくりというか地域づくりというのがどういうふうに展開されていくかというのと、やっぱりいろんなことが分かってきている。今日少し愛着の話も何名の方からか出ていましたけど、そういったことが起こらないような予防的な取り組みをどうやって行っていくのか。みたいなところが宿題として投げ掛けられたなというふう

に思っております。

これから、すごい高い壁というふうにおっしゃっていましたが、そこに対して今までのいろんな価値にとらわれず、多様性があることというのを理解して、本当に諦めず、取り組んで行く必要があります。多分ゴールがないんだと思います。一度つながっても、すぐほぐれてしまう関係もあるでしょうし。そう考えると、諦めず本当に動き続ける、走り続けることというのが大事なのかなと思って、皆さんのお話を聞いておりました。

地域の状況とか、家族の状況とか、本人に障害があることによって、その人が生きづらく感じていたり、何か参加できないということがあるのであれば、その人たちが他の人たちと同じように生きられるように、皆さんが先駆的な取り組みを広げてくださったり、大学のほうに研究もお願いしているところもございますが、研究して提案していただいたり、それを全国に汎化できるように考えていくのが私たちの仕事というふうに思っていますので、ぜひ今後ともご協力をお願いいたしますというのと、先駆的な事例をどんどん広めていただければというふうに思います。すいません、ちょっと感想になってしまいましたが、これで終わらせていただきます。

**菱沼** ありがとうございます。岡崎さんは以前、障害を持った子どもたちの支援の現場にも長くいらっしゃったというところで、冒頭におっしゃられた、ありのままに寄り添うという、まさにそのこれまでのご経験の中から感じられている部分なのだと思うのですね。確かに言われてみると生に寄り添う、その人それぞれのありのままに寄り添うという部分も確かに大事だなと思って伺っていたところでした。

今回、午前中に雄谷さんのお話を伺いましたけれども、まさに一人一人にどういう空間、関係性があったらいいのだろうというところで、さまざまな実践を広げてきてくださっているわけですね。

れども、それぞれのご発表を聞いていただいてのご感想、そして何か問題提起などありましたら、お願いしたいと思います。

**雄谷** この業界と言ったらおかしいですけど、利用者の皆さんと関わっているという共通点が何かつないでいる感じがあるじゃないですか。今日ご発表いただいた皆さん、一人一人、状況は違うのですが、でもなんか共感するものがある。その共感は何でもたらされているのかというと、さっき藤野さんが言った、バーンと全部ひっくり返すとか、そういう人たちがもたらしてくれているわけで、だからつないでもらっているんですよね。多分、この後、またビールを飲みに行くかもしれませんが。それはなぜ、それでおいしいビール、お酒が飲めるかということ、何言ってるんだよ、と言われるかもしれませんが、でも僕らは何もそういうご縁がなくて、こうやって笑って話ができるかということ、そうじゃないと思うんですね。そうすると、そういうことに感謝をするということがすごい大切なんだろうと思うんです。さっきのバーンとやる人たちも、うちもそうなのね。

あるとき、寿司が好きな人がいるんですよ。回転寿司に行ったんですね。僕の上に座っているわけですよ。流れてくると、だんだん空の皿だけが回ってくる。目の前のやつ全部、取って食べちゃう人。それで僕の下の人がすごい無然とした顔をして、大概にしろよという顔になって、途中まで気が付かなかった。2個のやつが1個だけになっていたとか、上のネタがなくてシャリだけが回ってくるとか。こんなことになるわけですよ。それで、そこは出入り禁止的なことになったわけですけど。チェーンなので、出入り禁止にはなっただけです。

ところが、強度行動障害のグループホームの近くに、今度は、いちげんで行くにはというかちょっと怖い、時価ですみたいなお寿司屋さんがあるじゃないですか。そこに、言葉はない、ちょっと

したことがあったら、すぐ飛び出て車にはねられるような人がいるんですけど、その人、強度ガラスまで割っちゃうような人、玄関サッシごと外に持っていっちゃうみたいな。近くのお寿司屋さんの、のれんをくぐって行くんですよ。そしたら、最初にイカが出てこないと駄目なんです。イカ、その次、ブリ。石川県ですからブリが好きなんです。しゃべれないんですね。ですから、カウンターに行って、決まった場所に座るんです。そのおやじは、お孫さんが知的障害の方なんです。分かっているんですけど、おお、イカだな、ブリだなと分かるんですけど、そのブリがないときがあるんです。そしたら大変なことになるって分かっているんで、イカをなるべくゆっくり出して、施設に電話して「ブリないから、すぐ来てくれ」って。そんなことなんですね。

コンビニも、また神対応のコンビニ定員という人がいて、その人には、グループホーム、もう一人、だーっと行って、夏の暑いときはアイスのストッカーへ行って、がっとなげて、その場で食べちゃう人がいる。食べるんですよ。食べるやつは決まっているんですね。この種類というのが決まっています。それで、そういうことにしてくれと。その代わり、案外、お金を出せるんですね。お金は出せるので、そしたら、ぽんと投げるから、それに、お財布、でっかいやつを持っていくので、彼は。そしたら、それにレシートと全部、入れて、それをそっと渡したら、何とかそれを持って帰るぐらいのことはできるようにみんなで頑張ってみるから、それで勘弁してって。それで結構、できるようになったんですよ。ところが、コンビニってローテーションがあるじゃないですか。それとか、すごい神対応のコンビニ、つぶれたんです。やっぱりそういうことばかりです。せっかく3年間かかって神対応のコンビニをつくってきたのに、なくなっちゃって学習塾になりました。うちの連中は学習塾になったのに入っていっちゃうんですよ。なぜあるものがないのだと。気持ちはよく分

かりますよね。そういうことがすごい、僕らもすいません、すいませんと言っているわけですけど、こういう感じなんだとか、それをだんだん周りの人が見ているとか。

それで最近、虹の話をするんですよ。藤野さん、虹って何色ですか。普通、日本人なら7色と言いますよね。でも、実をいうとアメリカ人は6色、どっちだったかな。ドイツ人は、ドイツが8色か。6色か。アメリカ人は8色と言うんです。台湾のある子は2種類とか、2色とか。実をいうと、感じ方が違うんですよ。同じものを見ているんですけど、感じ方が違うとか。イタリア人とか、なんかサングラスを掛けたらカッコいいじゃないですか。あんなになりたいですけどね。でも、本当は日本人みたいに目が黒くない人が多くて、虹彩が薄いから、やっぱり眩しいと、本気に眩しいという話だったりとか。だから、虹彩って指紋と同じぐらい全員違うんですよ。こんな模様があって、目の。だから、僕たちは同じものを見ているようで、実をいうと本当は一人一人みんな違う見え方しているんだけど、同じものを見ているという錯覚に陥りやすいので。みんな違って見えているんだよ、本当はというのを理解する。

そのときに、一番、僕たちが忘れちゃいそうになるのは、バーンとやられたりすると、何なんだよとなるじゃないですか。そのときに、その人を知る。難しいことを言わないで、なんでだと。なんでだろう。と思っている間は大丈夫。プロだから、分かんないことばかりですよ。人のことなんて、どうですか。奥さんのこと、全部、分かっていますか。どこへ行くのみたいなね。長い間、夫婦していて、だんだん分かっているようで分かってなかったりとか、分かんないほうがいいかなというときもありますし、全部、分からないから面白いんじゃないんですか、人間って。さっき、うちの動画もありましたけど、諦めてますよね。だって、問題はなくなりませんもん。ところが、なくなると言う錯覚はないですか、皆さん。どう

ですか。コロナとかでも、絶対、封じ込めて、絶対、うつらないようにするんだって。でも、無理でしたよね。そんな傾向ないですか、今。菊池さんどうですか。勝手に回し始めていいですか。

**菊池** コロナは本当に収まると思っていたのですが、なかなか、高齢者施設もやっているので職員が持ち込まなければ、あるいは面会をやめておけばクラスターは発生しないだろうということで、高齢者施設でクラスターは発生していませんが、いつまでたっても面会を面会禁止にしたりとか、職員にできるだけ外食は控えてくださいと言いつつ続けているとか。でも、なくなると思っていましたね。でも、なくならないですね。

あと、先ほど雄谷さんがおっしゃった、分からないというのは逆が、なんで分かっているのかということがあるんですけども。10代後半、18歳になっていない女の子が、住む所も食べる所もないので、ナザレ園さんで、制度は何もないんだけど、寝る所と食事を提供してくれないかという相談が入って、今日からと言うんですね。本人からも電話がかかってきて、おたくの法人はキリスト教主義ですか、洗礼を受けるとかクリスチャンになれとか強制されないですよ。埼玉にいて、今から新宿のコインロッカーで荷物を取って、それから茨城に向かいますが、最寄りの駅まで、終電で間に合わなかったら水戸駅まで迎えに来てください。すごいんですね。

何日か生活して、本当にものすごかったんですけど。例えば、ナザレ園さんの職員さんは仕事をちゃんとしていません。これが証拠です。ティッシュの中にも糸くずを見せて、掃除をちゃんとしていません。私の部屋に掃除に来てくれていません。理事長と私が呼び出されて、ナザレ園さんの職員は、2割はいいですが、8割は駄目です。専門職大学院のビジネスの授業で262の法則という、2割はいいんですね。すごいよく目が行っているなと思って、本当によく知っているし、現実を見抜

いているなと思って驚かされます。

**雄谷** ありますよね。だから、この人すごいなという感覚とか、どう持っているかという、すごく知ることとして、愛する愛の反対は無関心ね。無関心でしょう。だから、母親は、例えばうちの子は誕生日だから、何を欲しがっているのかって知ろうとするじゃないですか、一生懸命。一生懸命、知んことをずっとやっていれば、僕は分からなくても、それはプロとして合格だと思うんですよ。自分って言うだけじゃないですか。あれって結局、自分で折れるということなのでしょうけど、現場でいけば、いつも暴れている人だなというんじゃないで、ずっと知ろうとする。必ず原因があるので、知ろうとしていけば、いつか分かったときってあるじゃないですか。100 発、打って、99 発、外れても、1 発、わあ、これだったかというのが分かったら、もうそれでありがとうとなりますよね。

僕は、そのことを現場の皆さんといかに共有できるかということが、福祉の離職率とか、そういうものを防いでいくという、給料の問題とかいろいろあるじゃないですか。でも、実をいうと福祉ってすごい面白い仕事なんだというところを、人は難しいし、だから面白いよね。そんな暗闇にいて話せないし、うまく表現できない人のことでも、一つでも何か見つかったら、なんかいい感じだよな。みたいな。結局、ビール飲むんですかみたいな話になるんですけど。結局、そういうことで僕たちは今、つながっているのかな。そこをありがとうというふうに言えるようになると、回転寿司でめちゃくちゃやられても、ちょっといいから、分かった分かった、ありがとうありがとう、となるのかなという。

**菱沼** ありがとうございます。まだお話を伺っていききたいところなんですけれども、時間のこともあるので、少し最後、皆さんから一言いただきました

いなと思っているんですけども。今の雄谷さんのお話を伺っていると、実はこの生に寄り添うというのは、専門職だけじゃないなということが本当に感じられますよね。地域でいろんな方々との関わりで、その人たちもお互い暮らしている。そこをどう紡いでいくのかというところで、支援者の大事さもあるなということを感じさせられました。

今日はオンラインでありますけれども、学生たちも多く参加してくれているかと思いますので、最後に『生』に寄り添う社会福祉』となったとき、また今日のところでいくと地域の中の開かれた関係の中で暮らしていくことを支えていく、また垣根をどうなくしていくのか、そういうことを学生たちが将来、生かしていけるようにするにはどうしていったらいいのか、お一言ずつメッセージをいただきたいので、お一人、1 分ぐらいの中でコメントいただけたらと思います。藤野さんから順にお願いできますか。

**藤野** 本日はありがとうございます。学生さんたちに向けてお伝えしたいなと思っているのは、コロナ禍で入学してから学校に来れないまま卒業してしまうという時間、そういうこと、僕らにとっては未知の世界の体験をしてきている学生さんがいて、本当にご苦労されているんだろうなと正直、思っています。ただ、それでもめげずに勉強している姿、僕は当時、不良学生みたいなものだったので、本当によく頑張るなというふうに感心をしているところです。ただ、失ってしまった経験というのでしょうか、経験することを失ってしまった、そういう時期をどう取り返してあげられるかなというのは、今度はここにいる面々の人たちの役割かなと思っていますので、ぜひ小さなことでも相談する、そして打ち明ける、そして頼りにする、本当に寄り掛かっていいんだよという、そこを伝えたいなと思っています。

今日、実はTシャツを作っていてまして、なか

なか Zoom だと見えないと思うんですけど、同窓会に入って社大を盛り上げようということを書かせていただいております。社大は同窓会がとても強い組織ですので、皆さん、全国に同窓会生います。見えない人、ごめんなさい。同窓会生いますので、その人たちに甘えて、頼って、そして時にはお酒を飲んで言いたいことを言って、いい時間を過ごしてほしいなと思っております。以上です。ありがとうございます。

**菱沼** 櫻井さん、お願いします。

**櫻井** 私のほうから学生に向けてお話ししたいことは、まだまだ先の方もいると思うんですけど、就活されて新しい職場へという方とかいらっしゃると思うのですが、この大学の方は、皆さん、公務員になられる方とか、いろいろかと思うんですけど、社会福祉の事業に入っていく方がいらっしゃいましたら、できるだけいろんな法人さんを見て決めていただきたいなというところです。結構、安易に決めて、僕も近くで働いていたものですから、入ってこられる方が多くて、もっと広い地域に向けていろいろ目を向けていただけたらなというところですね。結構、お膝元の法人さんに就職される方が多かったのも、そうじゃなくて本当に見ていただければ、東京だけでも本当に数あります。ぜひぜひというところがございます。私のほうからは以上でございます。ありがとうございます。

**菱沼** ありがとうございます。酒寄さん、お願いします。

**酒寄** 藤野さん、不良学生というふうにおっしゃっていましたが、僕も学生時代はあまり勉強していないので何とも言えないのですが、ただ、ここはソーシャルワーカーの養成をしているということで、ソーシャルワーカー、ソーシャ

ル、社会福祉の勉強をしているので、当然、社会のことを知らないといけないのだろうと思っています。われわれが支援をさせていただいているのですか、対象の方、どちらかという社会の中の端っこのほうにいらっしゃるというか、いわゆるマジョリティーではなくてマイノリティーの方々なんだと思いますので、社会の中でそういった方が実はマイノリティーと言われつつもたくさんいて、社会の中で見えない存在になってしまっている方がたくさんいる。そういった方と出会う経験とかというのがすごく、うまく言えないんですけど、大切なのかなというふうに思ったりします。すいません、まとまらない。

**菱沼** ありがとうございます。では菊池さん、お願いします。

**菊池** 学生の皆さんへのアドバイスということで、私は専門職大学院に入る前に一般企業で働いていて、海外で何年か生活していたのですが、ビジネスの世界で外国語でしゃべっていて、金額を1パーセント値引きしてくれただけでも、会社が傾くような大変な誤解をしまう可能性があるもので、分かんないことがあったら絶対、何回でも聞き返す癖が付いていたんですね。外国語が流暢じゃないけれども、絶対に話が理解できるまで聞き返すという癖を付けていました。これが福祉の業界で、言葉がしゃべれない人、目が見えない人、いろんな障害で自分の言いたいことを訴えられない人と接するときに、何とかしてこの人が伝えようとしてることを理解できるまで頑張ろうという、そういうふうに、海外で体験したことが福祉実践につながっているなという経験しておりますので、機会があれば海外旅行でも留学でも、あるいはなくても日本在住の外国人とか、異文化の交流を積極的にするとか、あるいはNetflixで海外映画、ドラマを見まくる。とかしていただけると、少しは、全然、違う分野だけど、

役に立つかなと思います。以上です。

**菱沼** ありがとうございます。岡崎さんからコメントをいただけますか。

**岡崎** すいません、準備していませんでした。学生の皆さんは、私も福祉の大学を出ていますが、学生の期間の間にたくさんの経験をしていただければなと思います。楽しかったとか、学生でいる間で人とつながったという経験が、後々、生きると思います。やっぱり障害がある方とか、何らかの事情で社会と関わることに抵抗がある方という方たちに何かを選択してもらうときは、皆さんそこに選択肢を持っていないことというのが結構、多いんですね。そういったときに、自分自身がこういう世界を知っているよということだったり、こういうことが楽しいと伝えられるような経験を学生時代にたくさん積んでいただければなというふうに思います。

**菱沼** ありがとうございます。雄谷さん、お願いします。

**雄谷** コロナのこういう時期があって、ようやくこのホールも開放されるということで、いよいよだなと思いますけど、僕たちがプロとして三つのことは基本的にやろうよという、コロナの前よりも三つのことをきちんとやろうよ。これはどういうことかという、一つはしっかり食べる。バランスの悪い、野菜が嫌いとか、そういう人はコロナの前よりもしっかり野菜を食べよう、ちょっとでもいいから。二つ目は、運動しよう。コロナの前よりも運動しよう。別に難しい運動じゃなくていいですよ。厚労省の言う運動をしっかりと身に付いている人の条件というのは、1週間に2回、30分以上、1年間、続いたら、それで運動をきちんと常態化しているということになるらしいですよ。30分といっても、お散歩すればいいん

です。15分、行って、15分、帰ってくれば、それでできるので、今までちょっと運動は苦手だったなという人は、せめてそういうことをやろう。プロだからねという、そこをちょっと差別化しているんですよ、僕ら。

もう一つ、三つ目は寝ると。これはどうですか、皆さん。寝る30分前、直前までスマホをしていたりしませんか。そこはプロとして、せめて寝る30分前は封印して頭を落ち着けて寝ましょうねという、この三つを徹底的にやろうよと、コロナだから。そしたら前よりも、みんな、データをとったら、うちの法人だけで、みんな病気をしなくなったんです、風邪ひかないとか。やっぱりありがたいじゃないですか。そうすると免疫性が上がっているということなので、コロナにもかかりにくいということだと思って。

でも、こういう基本的なこと、あまりうろろろしないで、基本的なことをやる。こういうときだから、プロだからやるという。でも学生のときに、そんなことを言われても関係ないですよ。僕はそうでしたけど。そうでしたし、ただ一つは、僕も最後に、結局、坊さんらしくない話ばかりしてきましたけど、人生の最後の最後に何を後悔しますかと言われると、あのときチャレンジしとけばよかったという後悔の仕方が多い。やって失敗したという後悔を言う人よりも、あのときあれにチャレンジしておけばよかったというふうに言う人がいる。だから、特に学生の皆さんだったら、今、100年時代ですから、あと80年ぐらいあるわけですよ。そんなの、失敗したって大したことないんだから、そこであれだったら、後々よく考えたら、あそこでやろうと思ったけど引いちゃったとなったら、80年たった後に、あのときやっときゃよかったなと思うぐらいだったら、チャレンジしたほうがいいんじゃないですか。そういうことが高齢者の皆さんからすごい教えてもらえる。そういったことがいいのかなと。ぜひチャレンジしてほしいなと思います。以上です。



**菱沼** ありがとうございます。皆さんそれぞれ学生へのメッセージもありがとうございました。ご覧になっている皆さんがた、いかがでしたでしょうか。今回、『生』に寄り添う社会福祉』ということですが、きょうの中で生きづらさに寄り添うとか、あとはニーズにしっかり寄り添っていくというところもあったかと思います。また、午前中の話の中からも、楽しく寄り合うっていうところもあったかと思うのですね。さまざまなことが、今回、お話の中で出てきたかと思います。ぜひ皆さんがたなりに考えていただいて、これからつなげていただけたらと思います。

それでは、これをもちましてシンポジウムを終わりにしたいと思います。どうも皆さまがた、ありがとうございます。